滋賀県内における集団塒をつくる鳥類とその塒地の分布

植田　潤　　滋賀県

1．はじめに

鳥類の日周活動における休息の場が塒(ねぐら)である。鳥類の塒の取り方には、さまざまな形がある。自然観察者の中でよく知られているのが、ムクドリなど集団で塒をとる集団塒もそのなかのひとつである。滋賀県内で集団塒をつくる鳥類は21種程度知られている。これまで、たくさんの観察者による塒観察が県内各地で行われてきた。集団塒をつくる鳥類の塒地は人間の生活に重なる部分が多く、人間との摩擦がしばしば起こる。また、人間との摩擦がない場合でも、塒地という環境が理解されないまま壊されているのが現状である。集団塒をつくる鳥の種類や塒地を記録しておくことは、その鳥類の保護のみならず、周囲の環境の把握につながるなど重要であると考えられる。今回、滋賀県内で集団塒をつくる鳥類とそれらの塒地を記録し、データベース化する目的で調査をおこなった。また、集団塒地の観察会を行い、身近な自然環境（地域の自然環境）について啓蒙をおこなった。

2．鳥類の集団塒について

黒田（1982）は鳥類の塒を３型に分けている。ムクドリやサギ類など採餌地は分散しているが、夜間（日中）の休息時には集中して塒を作る集中塒型、エナガやキバシリ・ミソサザイなど一定区域を移動しながら採餌し、休息時には分散した小集団ごとに集まって休息する分散塒型、シジュウカラやキツツキ類、ヒヨドリなど日中群れで採餌している種類でも、夜間などの休息時には樹洞や茂みなどでそれぞれ単独の塒をとる単独塒型の３型である。一般的に集中塒型の鳥類がつくる塒を集団塒（しゅうだんねぐら）という。ここでは10羽以上が一箇所に集中して塒をつくるものを集団塒として定義する。

このような集団塒を滋賀県内でつくることが知られている鳥類は、カワウ・ゴイサギ・コサギ・チュウサギ・ダイサギ・アマサギ・アオサギ・オオヒシクイ・コハクチョウ・トビ・チュウシャクシギ・ユリカモメ・ツバメ・ショウドウツバメ・ハクセキレイ・セグロセキレイ・スズメ・ムクドリ・ミヤマガラス・ハシボソガラス・ハシブトガラスの21種類が記録されている。

3．調査方法

・集団塒地の記録

集団塒が形成されるのは、主に非繁殖期である。非繁殖期の塒入りの個体を目視、追跡した。これは観察に熟練した者でないと難しいが、視界の広い場所で飛び去る方向を地図上に落としていき、追跡していく。さまざまな種類について塒地を調査するため、可能な限り調査に出て、日没前後に調査できるようにした。

同時に、自然観察会などで野鳥観察をしている人などから広く情報を集め、塒地発見に努めた。

また発見した塒地については、環境省の３次メッシュマップを利用し、メッシュコードと緯度経度を記録した。それぞれの塒地を記載し、目録（表１）を作成した。

・ツバメの集団塒地での観察会
　およびバンディング

ツバメの集団塒地で、野鳥の会主催の塒観察会

を行った。また別の塒地ではバンディング（環境省がおこなっている標識調査）をおこない、集団塒地を利用する個体などの調査を行った。

4．結果

滋賀県内では21種の鳥類が集団塒をつくることが確認された。また今回の調査で68箇所の塒地を確認した。塒地として利用されている環境で一番多いものは、琵琶湖の湖岸部周辺で、ヨシ原・ヤナギ林・人工構造物などである。これは、集団塒をつくる鳥類が平野部に多く住み、これらの鳥類の好む環境があるからであろう。これら塒地のうちで、13箇所の塒地が周辺住民らと摩擦があり、住民らによる追い出しが行われている場合が多い。そういった塒地は、場所が安定しないなど塒地の存続が危ぶまれる地域がほとんどである。

以下に各種についてそれぞれ述べていくことにする。

・カワウ

繁殖期は、繁殖個体も繁殖をしない若鳥も繁殖コロニーで塒をつくる。非繁殖期では、主に水面上の人工構造物や、岩礁、樹林に塒をつくる。就塒前集合は行わず、採餌地から直接塒に入る。日没後かなり暗くなってから個々に塒に入る個体が多いのもカワウの特徴である。

・ゴイサギ

繁殖期には他のサギ類に混じって繁殖活動を行うが、非繁殖期においては明らかに他のサギ類とは違う場所に塒をつくる。これは生活型の違いからくるものであろう。夜行性のため昼間に塒をつくるが、湖岸や溜池など水辺に生える樹林や人工構造物などに塒をつくることが多い。塒に集まる数もかなり差があり、数羽から数十羽までまちまちである。

・サギ類（コサギ・チュウサギ・ダイサギ・アマサギ・アオサギ）

サギ類は繁殖期も同じコロニーで繁殖し、繁殖を終えた個体から集まって集団塒をつくる。チュウサギとアマサギは夏鳥であり、その他も冬季は移動するため、県内では11月以降減少する。塒地は水際の樹木や人工構造物が多い。

・オオヒシクイ、コハクチョウ

湖北町を中心に越冬季定期的に飛来するこれらの種は、越冬季は採餌と休息を一日のうちで繰り返している。休息時オオヒシクイは湖北町の湖岸と浅井町の西池主に、コハクチョウはびわ町や今津町・草津市の琵琶湖湖岸部に集まって塒をつくる。

・トビ

滋賀県内では７箇所の集団塒地を記録している。適当な場所に就塒前集合し、かなり暗くなってからいっせいに塒地へと移動する。そのため、本当の塒地がなかなか発見できないのが現状である。特に湖東地域において塒地がいまだ発見できていない。

・チュウシャクシギ

春の渡りの時期（４月下旬～５月中旬）に守山市の湖岸近くの水田に、集団塒をつくる。植えたばかりの稲を踏み荒らすとして、水田の持ち主は塒にあつまっていた群れを追い払うなどしており、今後塒地として安定して存続できるかどうか要注目である。

・ユリカモメ

冬季飛来し、琵琶湖で塒をつくり一部京都の鴨川まで出かけることは有名である。琵琶湖の大きな河川の河口部に集団塒をつくり、今回の調査で、南湖では大津市沖、北湖では姉川河口沖にそれぞれ集まることが観察できた。就塒前集合を行い、南湖では琵琶湖競艇場付近、北湖では姉川河口に一度群れが集合する。それぞれの湖上の塒地は定まっておらず、船の通過などで少し場所を移動することも多い。

・ツバメ

繁殖を終えた個体や、その年生まれの幼鳥は集団塒をつくる。県内ではヨシ原を塒地としており、琵琶湖を中心に4箇所の集団塒地が見つかっている。それぞれの地域で一番大きなヨシ原を塒として利用しており、塒地として適切な場所をツバメが選んでいると考えられる。特に新旭町深溝の集団塒地は、今年になって今までの内湖のヨシ原から湖岸の植栽したヨシ原へ移った。これは植栽したヨシが大きく育ち、今までの内湖の塒地より安全であるとツバメが選んだためと考えられる。

県内では南湖で越冬個体が少数見られる。(越冬ツバメ)。堅田港の建物に塒をつくることが今回発見された（図1）。

・ショウドウツバメ

8月下旬～11月中旬にかけて、県内を通過する際ツバメの群れに混じって塒をつくるようである。

・ハクセキレイ

非繁殖期に多く見られる。集団塒地をつくるのもこの時期である。塒地は街路樹から橋やビルなどの人工構造物で、必ず塒地の周囲に広い平坦な部分（工場や体育館などの屋根や、車どおりのほとんどない道路）がある場合が多い。それは就塒前集合を行うのに都合がいいためと考えられる。就塒前集合を必ずし、いっせいに塒地へと入る。

・セグロセキレイ

ハクセキレイのように大規模ではないが、同じく非繁殖期に集団塒をつくる。冬季はハクセキレイの集団塒に混じるようである。

・スズメ

非繁殖期に集団塒をつくることは有名で、古くはこれら塒地に網を仕掛けて猟をしていた。県内でも竹林・雑木林・ヨシ原などに塒地をつくる（図2）。

また、一部は個々に塒をする個体もおり、それらの関係についてこれからも定期的な観察が必要である。

就塒前集合を行い、多くがその場所を水田を利用する。農家との摩擦は避けられないのが現状である。

・ムクドリ

スズメと同様に、集団塒をつくることがよく知られた種である。非繁殖期に塒をつくるが、その塒地は季節によって変化する。街路樹を塒地とするものは街路樹の落葉とつながるものがると考えられる。

・カラス類（ミヤマガラス・ハシボソガラス・ハシブトガラス）

非繁殖期、竹林や森林に集団塒をつくる。塒地は県内11箇所の記録がある（図3）。冬季、ミヤマガラスの群れが集団塒に加わるためいっそう集塒個体数が増える。

人家近くのものは糞害や、食害（庭の作物を荒らすなど）などで、周辺住民から苦情が出るなど大きな摩擦となっている。就塒前集合を行い、塒入り行動は結構目立つ。

カラス自体が一般の人にもわかりやすく、目立ったため塒地への移動がわかりやすい(図4)。県内での移動状況など調べるなど今後調査課題である。

5．今後の課題

今回できるかぎりの追跡をおこなって塒地発見に努めたが、県内でまだ多くの種で塒地が未発見となっている。特に湖東地域の塒地はなかなか発見できていない。今後も続けて調査を行いたい。また、人間との摩擦が大きい地域については今後、塒地そのものが移動または消滅する場合も考えられる。地域への理解と、代替地の保障など課題も多い。

6．おわりに

今回この集団塒をつくる鳥類とその塒地目録を作成するにあたって、滋賀県内のみならず他府県も含めてたくさんの研究者・観察者の方々の情報

提供など協力があった。これらの情報と協力なしでは県内全てを網羅するものを作り出すことは到底できなかったであろう。また、ユリカモメの塒調査では、田中満氏、松岡正富氏に船を出していただき、琵琶湖上をユリカモメ追跡のため無理をお願いすることもあった。この場を借りてみなさまに厚く御礼申し上げたい。

017 下物					観察者（調査協力者）	植田潤
3次ﾒｯｼｭｺｰﾄﾞ	5235—4785					
所在地住所	草津市下物					
環　境	ヨシ			緯度	35.04N	
使用時期	非繁殖期			経度	135.57E	
利用種（確認種数）	スズメ 10000	ツバメ 20000	ショウドウツバメ 1000？	セグロセキレイ 24	サギ類 200	カワウ 357

本塒地の状況

◎スズメ
非繁殖期（7月～1月まで）で利用している。周辺での、レジャーボートによる圧力があるが今のところは定着している。湖岸道路との間のヤナギ林がいい遮蔽物になっているようである。

◎ツバメ
南湖でこの部分にしか塒が発見されていない。スズメと塒場所の争いが多く、過去近辺のヨシ原へ塒地を移動したこともあるが、現在は定着しているようである。

◎ショウドウツバメ
ツバメの群れに混じる。総数はわかりにくく、なかなか把握が難しい。

◎セグロセキレイ
「水の森」に集塒前集合を行い、ヨシ原へと入る。

◎サギ類
南湖最大の集団塒地のようだ。冬季は著しく数が減り、大半が移動するようだ。

◎カワウ
南湖最大の集団塒地のようだ。堤防上から観察しやすく、カラーリングの確認に有効と思われる。レジャーボートが付近に近づくとやはり警戒しているようである。

本塒地と人間の生活との摩擦や問題点

◎人間との摩擦はほとんどない。

◎レジャーボートなどが周囲を回ることもあるが、あまり気にしていないようだ。すぐに塒地へもどる。

◎ここ数年、滋賀県野鳥の会や、日本野鳥の会京都支部などでツバメの塒観察会が行われている。
参加者も多く、特にツバメの集団を観察して感動を覚えて帰る人も多い。

表1　滋賀県内の塒地目録（記載事項例）

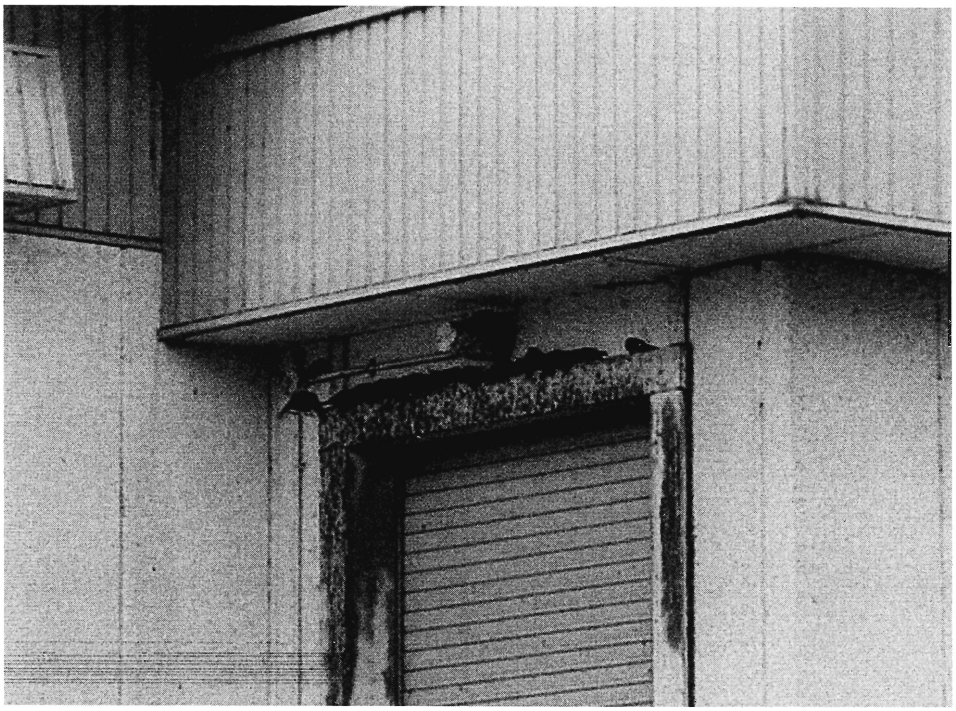

図１　越冬ツバメが塒地に集まっている様子（中央）

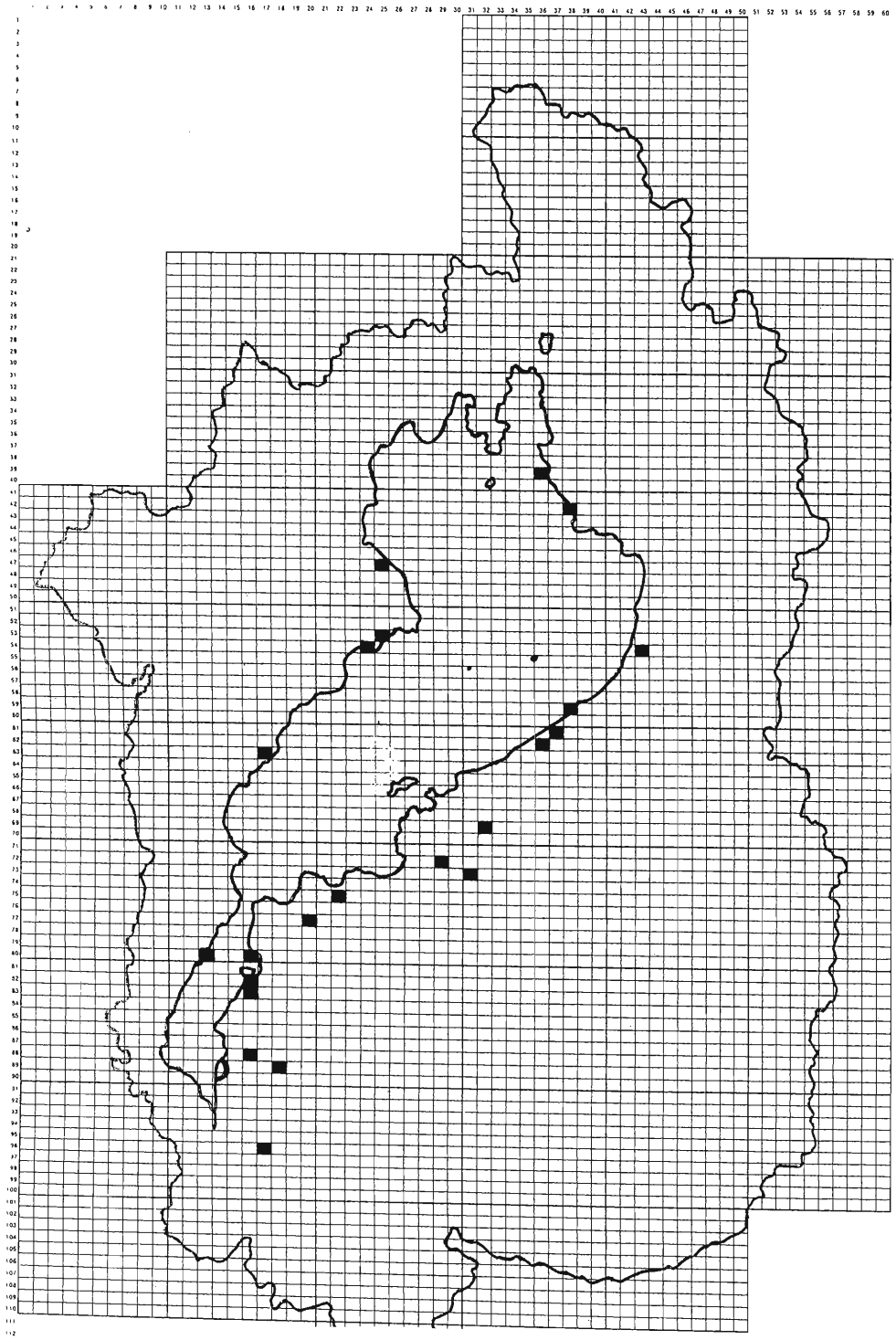

図 2　滋賀県内におけるスズメ（Passer montanus）の集団塒地

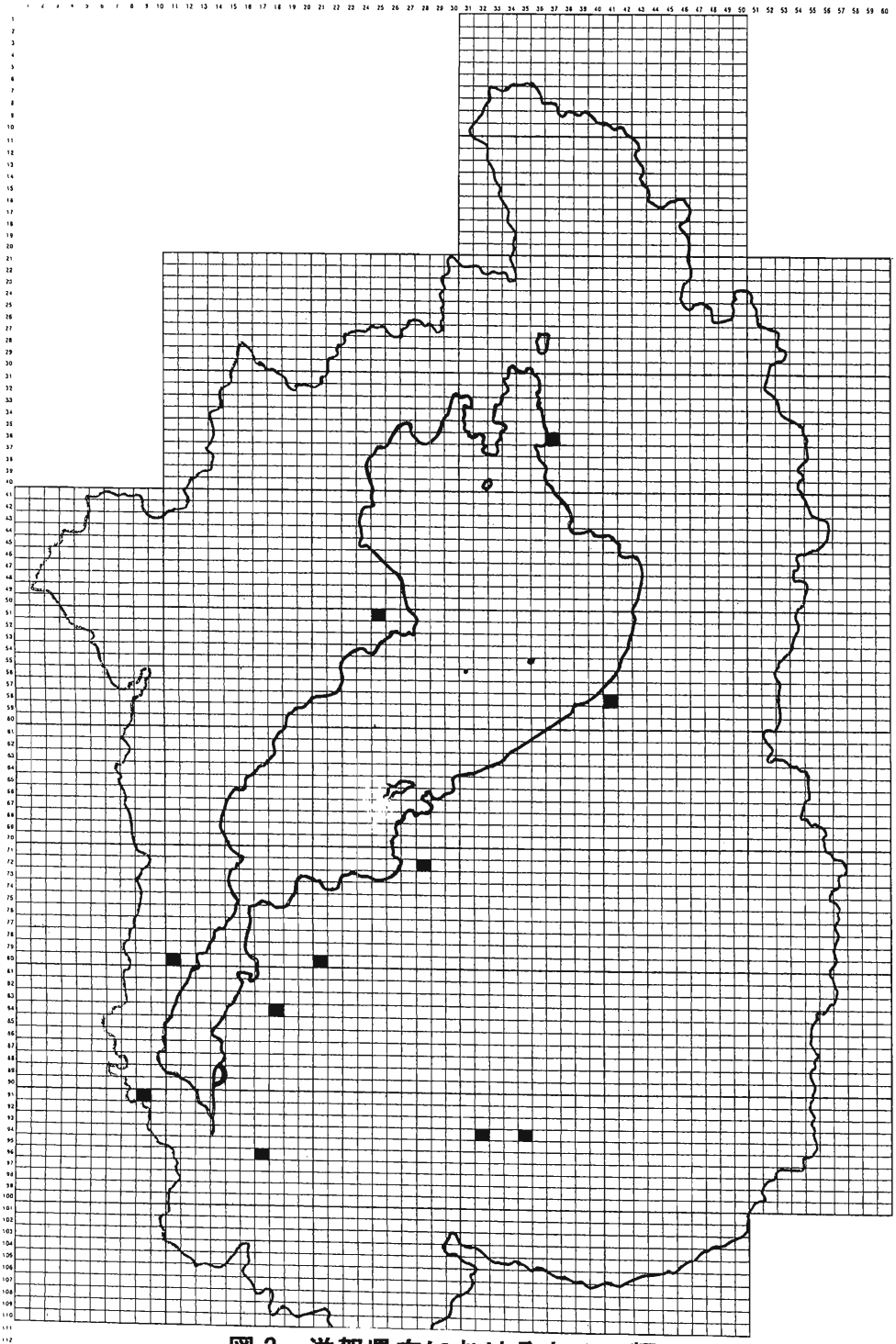

図３　滋賀県内におけるカラス類（Corvus ）の集団塒地

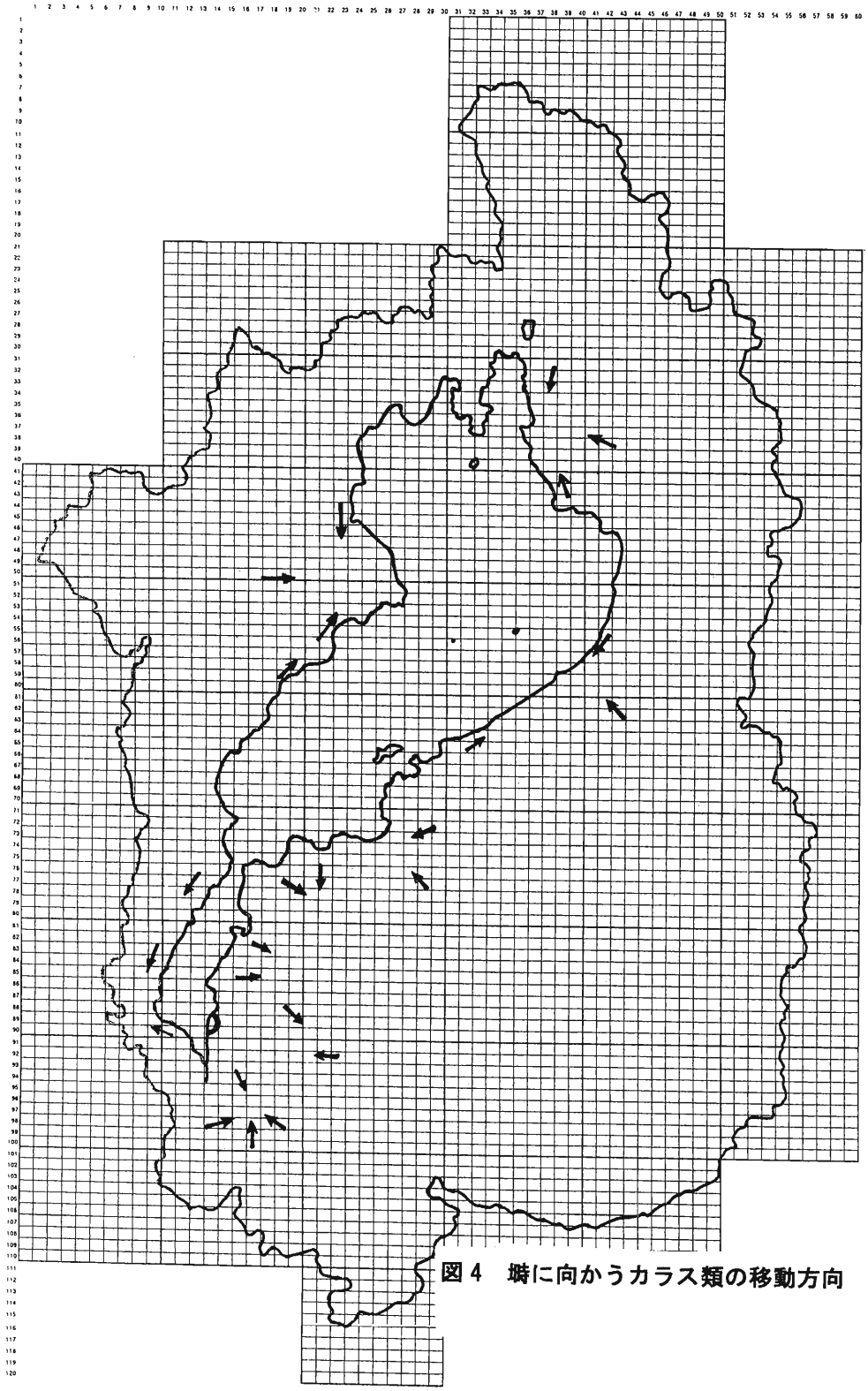

図 4　塒に向かうカラス類の移動方向